



武蔵野S町物語

永倉萬治

Nagakura Manji

武蔵野S町物語

永倉萬治



筑摩書房



ちくま文庫

武蔵野S町物語

二〇〇一年十月十日 第一刷発行

著者 永倉萬治 (ながくら まんじ)

発行者 菊池明郎

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三 千一三一―八七五五

振替〇〇一六〇―八―四一―三三

装幀者 安野光雅

印刷所 株式会社精興社

製本所 株式会社鈴木製本所

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本及びお問い合わせは左記へお願いいたします。

筑摩書房サービスセンター

埼玉県さいたま市櫛引町二一六〇四 千三三一―八五〇七

電話番号 〇四八―六五一―〇〇五三

© YUKO NAGAKURA 2001 Printed in Japan

ISBN4-480-03673-3 C0193

—ちくま文庫—

武蔵野S町物語

永倉萬治



筑摩書房

武蔵野S町物語

插画 小島武

そこは、櫟の大木がところどころに聳え立っているだけの、何の変哲もない田舎町である。

旧道と呼ばれる砂利道に沿って、野火止用水が流れているのが唯一名所といえはいえる。昭和三十年代初めの頃。この町には、これといった名物もなければ、発展するような産業もなかった。人口の半分を占める周辺の農家では、耕運機の爆発的な普及が進み、4Hクラブの活躍などで、ようやく近代化されつつあった。

S町の駅から北に向かって真っすぐ行くと川にぶつかる。距離にして約二キロメートルがこの町の主要な場所だ。

もともとは、川越と江戸を結ぶS川の河川交易の中継点としてさかえた町である。船着き場の近くには、古い瓦と土蔵造りの建物が多く、石造りの洋風二階建ての銀行や木造の警察署、薬問屋や肥料屋をはじめとする小商いの店が軒を並べ、市場と呼ばれて賑わって

いた。

大正三年の東上鉄道の開通にともない、回船問屋が鉄道の貨物取扱所が変わって、駅の周りもだんだんに賑わい始めていた。

そういうわけで、この町で唯一の舗装道路は、この駅から市場までの間だけだ。舗装されたのは、昭和三十年になるかどうかの頃だった。珍しいこともあってか、人々はわざわざ舗装道路を見に行つて、かならずその上で跳ねたのである。

舗装道路といつても、自動車はたまにしか通らず、牛が荷車をひいて通るような道だった。

町で一番高い建物は、三階建ての小学校である。三年前に新築した時は、ガキどもが屋上にのぼり、いっせいに唾を地面に吐いた。それほど、三階は高かった。

昼を告げるサイレンの音が、いまよりずっと遠くまで聞こえ、樺の大木が町のあちこちに聳え立っている以外は何もさえぎるものはなかった。胸いっぱい息を吸い込むと、花々の匂いと土くさい田舎の匂いが鼻を刺激した。

空が、広がった。



地面からゆらゆらと陽炎^{かげろう}がたちのぼり、晴れわたった空に雲雀^{ひばり}の声だけが聞こえている。他に音らしいものは何も聞こえない。

時折、飛行機の爆音が遠くの空から聞こえて来るが、やがて爆音が遠ざかると、また、雲雀の甲高い鳴き声だけになった。

少年は、雲雀を追っている。声だけが聞こえているが、いったい雲雀はどこへ行ったのか。菜の花畑に飛び込んで、甘い匂いを吸いながら、少年は、全力疾走をしていたが、レング畑に出たところで立ち止まった。少年は息を弾ませている。目を細めて空を見上げた。空のずっと上に雲雀が飛んでいるのが初めて見えた。

昨日遅くに、近くに住む中学生が雲雀を捕まえて、ボール箱に入れたのを見せてくれた。雲雀をすぐそばで見るのは初めてだった。箱の中にちっぽけな鳥がいた。意外に可愛らしいと少年は思った。中学生は、雲雀は降りたところと違う方向に行く、それを待ち伏せるんだと自慢そうにいった。

少年は、あまり考えたりしなかったから、すぐにやってみようと思った。

空の高みに雲雀は鳴いていた。

少年は、その場にじっとしていた。雲雀が舞い降りて来るところを待っているのだ。

紺の野球帽にとりどころ破れた黒いズボン、バンドはやたら長く垂れ、紺と灰色の段々模様のセーターも二カ月は着ているやつだ。靴は、これまた汚れた運動靴を履いてい

る。少年は、じっと待った。雲雀が急に降りて来た。すぐそばだ。雲雀は草むらに降りた。少年は胸がドキドキした。いまだ、と小声でいうと、少年は雲雀の降りたところより少し離れた草むらを目がけて走った。レンゲ草の上に野球帽をめちやくちやにかぶせたが、草の匂いが強くなったただけだった。雲雀は少年のすぐそばから、パタパタと空高く飛んで行ってしまった。

少年は、荒い息をしながらその場に寝転がった。そこから見ると空がどこまでも広がっているように見えた。レンゲ草が耳元をくすぐる。

雲雀は、空の高みで、点のようになって鳴いていた。

少年の名は清島健一といった。

四月になれば四年生になる。

駅に近い裏通りは、小商いも二、三軒あるだけで、平屋が並び、ところどころに畑が残っている。その一角の洋品店が健一の家である。

健一の父親は、戦争当時北支（現在の中華人民共和国北部地方）に渡った砲兵隊の隊長だった。軍の命令で南方へ移動する途中に日本へ寄り、船を待っている間に終戦になった。

「兄さんは、運がいいからな。商売だつてうまくやるかしんないよ」と終戦後すぐに母方の叔父さんがいったそうさだ。

父親は終戦の時、たまたま家に帰っていて、八月十五日には、縁側から軍刀を持ち出し表に飛びだそうとしたらしい。そこを祖父、文エ門が父親の体を羽交^{はがひ}締めにして「はやまるんじゃない」と諫めたという。

父親はもともと織維問屋に小僧として勤めていたことがあり、その関係で、戦後すぐに洋品店を始めたのである。とにかく物があれば売れる時代だったから、すぐに商売は軌道に乗った。親戚の叔父さんがいった通りになったわけだ。

昭和二十七年に父親は、店の後ろに六畳一間を増築した。自分の家族が川の字に寝られるところと、父親は口では何もいわなかったが、戦争が終わって、しみじみとそう思ったに違いない。この時、父親は、もうひとつ憧れていたのだろう、六畳の屋根に天窓をつけたのである。星が見える部屋。

夜になると部屋の電気を消し、父親は興奮しながら「いいか。よく見るんだぞ」と健一を持ち上げて天窓に近づけた。部屋から星が見える。そのはずだった。しかし、頼んだ大工が悪いのか、ともかく天窓の向こうは真っ暗だった。何も見えなかった。健一は、何も見えないのだけれど、何度も持ち上げられるのがうれしくて、それだけでケラケラ笑った。

あとになって天窓は、ひどい雨漏りの原因となって、暇さえあれば父親は屋根に上って修理の日々を送ることになったのだが。

父親は、工夫好きである。それも天窓と同様、どこか理想と現実が食い違ふのだった。父親の工夫には針金と大きな紙が必要だった。針金を膨大に買い込んで、店の中に張り巡らし、大きな紙に「ブラウス、若向き」とか「ランニングシャツあります」などと書いたものを吊り下げたり、いろいろ工夫をするのだが、その割りにはどこか貧乏くさいのが健一にもわかった。

父親は、終戦を埼玉県の吉見で迎えた。考えてみれば運のいい男といえる。戦争中は、北支にある予備士官学校の砲兵部隊に所属していたことがあり、原隊は南方のニューギニア方面で全員死亡したという。父親は吉見にあった駐屯地で南方に行く指令を待っていたそう。それが終戦を迎え、戦死を免れたわけだ。戦後、父親はS町に戻り、吉見で知り合った女教師と結婚する。それが健一の母親である。

母親は、戦前は小学校の先生をしていた。「いい先生だったんだ。ほら、いい先生だろう」と母親は戸棚から古いアルバムを持ち出して、健一に見せた。それには、校庭でオルガンを弾いている若い頃の母親の周りを着物姿の子供が囲んで歌っている写真があった。まるで「二十四の瞳」だが、彼女がいい先生かどうかはわからなかった。

軍人であった父親の駐屯地が母親の勤める小学校の近くにあったために、二人は知り合

ったらしい。戦争は激しくなっていくのに、恋愛結婚で結ばれたというのだから、余裕があったのか、無謀だったのか。ともかく二人は所帯をもった。

そして終戦の翌年よくとしの昭和二十一年、長女が生まれ、健一はそれから二年後のまさしくどさくさの時代に生まれたのである。

父親は、物のない時代をなんとか生き抜こうと考えたすえに、洋品店をひらくことになる。そうするうちに子供にも恵まれ、商いも軌道に乗って、やっと平和が訪れたという実感が湧いてきた。ところが、長女が自家中毒であっけなく死んだ。そればかりでなく、次女、三女とたてつづけに亡くしたのである。健一は長女のこと何ひとつ覚えていないが、年子の妹の次女と一緒に障子にクレヨンでめちやくちやな絵を描いたのはおぼろげに覚えている。

ある日、ばあさんが亀の甲模様のねんねを健一に着せて、二階へつれて行った。健一は四歳だった。下の座敷では母親が泣き伏して、泣き声が家中に響いていた。その横に父親とじいさんが黙って座り、次女の遺体を見ていた。ばあさんも健一を抱き締めながら何もいわず泣いていたのを覚えている。

両親の悲しみはたとえようもなく大きかったことだろう。そんな不幸が続けば、子供の健康に神経質になるのは親として当然だが、父親の場合、それが度を過ぎた心配性となっていた。元来この家には、健康にたいする科学というものが欠けていた。ほとんど、じ

いさんばあさん仕込みの、古来から伝わる迷信によって家族の健康は保たれてきたようなものだった。ところが戦後になって、それらを全部否定し、科学万能とみなす風潮になると、父親は何によらず思い込みが激しい方だから、少しでも子供の様子がおかしいと医者に走るようになった。ところが子供たちは次々に死んでいく。父親は暗澹たる思いの中で、必死に病氣の原因を見いだそうとしたのであろう。その結果、あんこを食べたのがいけなかったのだらうという結論に落ち着いたのである。

そしてさらに、亡くなった女の子三人の名前は皆「子」がついていることに注目した父親は、その後生まれた二人の娘には「子」のつかない名をつけた。偶然か、勘があたったのか、妹二人は何度か病氣はしたものの、無事に育っている。

母親は店の中にも、何やら常に他のことを考えているようなところがあつた。

ある時、風が突風のように吹いて、衣紋掛けにかけた売物のブラウスがヒラヒラと飛んで行ってしまった。母親は、そのときも何か考えごとをしていたらしく、それには気がつかなかった。父親があわてて表に飛びだし、ブラウスの行方を追った。店の外の砂利道には、車の通る気配もなく、電線が風に揺れているだけだ。突風がやたらに吹いて、父親はあっちへよろけ、こっちによろけたりしながら危うく地面に落ちる直前にブラウスを手にした。

父親は店の中に入って母親に怒鳴った。

「おまえ、しっかりしろよ。ブラウスが汚れちゃうじゃないか！」

「あれっ、ブラウス、飛んじやったの。知らなかった。そうか。行けばよかったね」と母親は座ったまま、他人^{ひと}ごとのようにいった。

工夫好きの父親と、どこかうわの空の母親、二人の妹、そして祖父と祖母が健一の家族である。